

今の指導の効果を更に高めるのは「学校の一体感」

集団での学びを大切に

生徒に未来を切り開く力を育む

長崎県立諫早高校教務主任 石山雅晴

社会の変化が激しい現代で、生徒に必要なのはどのような社会になっても自ら未来を切り開いていく力だ。そのような力は、日々の高校生活や授業の中で身に付けることが出来ると、諫早高校の石山雅晴先生はいう。鍵となるのは知的好奇心を高める授業、そして学び合う集団づくりだ。

難しい問題に挑戦しようとする生徒たち

近年、新入生に接するたびに、学ぶ意欲、学力共にその差が年々広がっていると感じます。

ある小学校の先生から、現行課程で教える内容が減ったにもかかわらず、テストの平均点はあまり変わらず、テストの平均点はあまり変わっていないと聞きました。旧課程で教えていた内容を100としたら、現行課程は70くらいにもかかわらず、平均点は同じ80点くらい。学ぶ量を

減らしても、内容を理解している子どもは増えていないのです。こうした傾向は、中学校では更に顕著になっていくのではないのでしょうか。

本校に入学する生徒は中学時代によく勉強してきている方ですが、底を支える学力が不足していると強く感じます。学力の高い生徒は、予習・復習をしなくても授業を理解できていたのでしょうか。ところが、難しい問題に正面から取り組んだ経験がないため、問題を解く楽しさも知らず、高校で解けない問題を出され

た途端に背を向けてしまうのです。

かつては、難しくても自分なりに解決策を見いだそうと必死に食いついてくる生徒がいましたが、今は正解さえ分かれば理解した気になる生徒が多いと感じます。表面的な理解で安心してしまい、テストでは正解できないことも多いのです。

それにもかかわらず、「質問は勉強の出来ない生徒がするもので、自分とは関係ない」という意識を持つ生徒が大勢います。中学時代には大抵のことが出来たために、勉強が分

からない自分を格好悪いと考え、その結果、教師に質問できないまま解決を先延ばしにしてしまうのです。

一方、すぐに答えを知ろうとして、教師に安易な質問をする生徒もいます。私の担当教科は国語ですが、記述問題では「こういうポイントが入っていないとだめだよ」と言い、自分で答えを考えさせるように指導しています。ところが「ではどう書けばいいんですか」とすぐに質問しに来る生徒がいます。私が「ここで模範解答を言ったら、君はずっ

と書けないままだよ」というと、次第に質問に来なくなるのです。

学習の質を高める質問が出来る生徒を育てたい

「つまづくことを恐れず、出来ないことを自分に隠さない生徒に育ってほしい。分からないことをみじめに思って安易な答えに走らず、よりよい答えを求める生徒を育てたい」
そうした思いから、質問するのは「質問をするのは当たり前」という空気を、学校全体でつくり出すことが必要だと感じています。

本校では、職員室の外に並べた長机で自習をしながら先生方への質問待ちをする生徒の姿が絶えません。しかも、質問する生徒の多くは、笑顔で教師に質問してくるのです。分かるまでの過程を楽しんでいる先輩の姿を見るうちに、1年生は「出来ないから質問するのではない」「勉強はやればやるほど疑問が湧いてくる」「授業で分かった気になっただけでは質問は出来ない」と気付くのです。

安易な質問に対しては、教師が根強く指導するしかないと思っています。良い質問とはこういうものだというのを、授業で具体的に紹介する。質問内容によっては、「もっとよく考えなさい」と門前払いしてもよいと思います。

古文では、一つの文章に対して何通りも解釈できる場合があります。「分からない状態をうろうろすることの面白さ」を生徒に体験させるため、授業であえてその過程を見せることもあります。「一つめの解釈だと不具合が生じる個所があります。二つめの解釈では、今まで教えてきた内容と矛盾するので、実は先生も迷っています」と言うのです。すると、生徒はざわつき始め、意識の高い生徒は自分で調べたり、友だちに相談したりします。こうした投げ掛けを繰り返すうちに「こういう解釈もあると思うのですが」と、模範解答とは異なる自分なりの解答を導き出す生徒が現れます。このような質の高い質問が出てきたら、すぐに授業で紹介します。他の生徒には「良い質問」とはどういうものか実感させると同時に、少しずつ分からない

状態を楽しめるようになってくるのではないかと思うからです。

生徒には、すぐに答えの出ない問題を考え続けることの楽しさを知ってほしい。すべての授業で実践することは難しいのですが、そういう体験が出来るような知的好奇心を喚起する授業を行うことが何よりも重要なのだと思います。

集団での学びを大切にしたい 授業づくり

生徒が授業に向かう態度は、さまざまです。前を向いて授業を受ける生徒がいる一方、落ち着きがなく、意欲の見られない生徒もいます。

ただ、意欲が感じられない生徒でも、勉強が出来なくていいとは思っていません。「分からないことは後で個別に聞けばいい」という気持ちがあるのでしょうか。何でも個別に対応してくれる塾の指導に慣れている生徒には、教室で皆と一緒に学ぶことの意義を今まで感じずに過ごしてきたのかもしれない。

高校では、「個」の学びから「集団」の学びへ転換することも必要だと思



いしやま・まさはる◎教職歴27年。長崎県立長崎東高校、西陵高校、彦岐高校を経て、諫早高校に赴任して8年目。彦岐高校と諫早高校で計7年間進路指導主事を務め、現在は教務主任。担当教科は国語。
長崎県立諫早高校◎全日制・定時制／普通科・理数科／共学／1学年約3200人／10年度入試の合格実績（現浪計）：国公立大は、北海道大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、広島大、九州大、長崎大などに236人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ148人が合格。

います。授業中に短時間でも周囲の友人と話し合わせる時間などを取ることで、考えを伝え合う楽しさを実感できるのではないかと思います。

集団で学ぶということは、あまり他人には見せたくないような、自分が頑張る姿をどう見せるか、ということでもあります。最初からそれが出来る生徒は多くありません。そこで、本校では導入期指導を重視しています。集団行動を通じて、全員で身体を動かしたり大声で校歌を歌っ

たりする活動を行い、皆で全力を尽くすことの楽しさを感じさせるのです。早い段階でこのような活動を行うことで、教師の指導に素直に耳を傾ける態度、真面目に授業を受けようとする姿勢が育まれると考えています。

「ピラミッドの见えない部分」を自ら希望する生徒たち

集団で仲間と学ぶことは、集団における自分の役割を自覚することにもなります。

本校の体育大会では「10段ピラミッド」を行います。2年生男子の総勢170人で10段のピラミッドを完成させるのです。ピラミッドには正面から見える部分の後ろに、見えない部分がたくさんあります。大変なのは、見えている最前列ではなく、後方や下方で支える位置ですが、そうした位置でも希望者は大勢います。ピラミッドの完成は、周囲の歓声で感じ取るだけで、自ら目にすることはありません。しかし、終

わった後、全員が肩を抱き合い、喜びを分かち合う姿は、仲間と共に学んだ成果だと実感します。

学校全体の一体感も大切にしていきます。そのクライマックスといえるのが、センター試験当日の見送りです。3年生全員がバスを連ねて、会場に向けて学校を出発します。道の両側には1、2年生全員がずらりと並び、部活動の旗や応援ボードを掲げて見送ります。校歌を歌ったり、先輩の名前を連呼したりする様子は、バスに乗っている私たち教師もゾクゾクするほどです。

目標は異なるけれども、互いに刺激し合い励まし合いながら学び続ける。そういう集団をつくるのが、学校の活力を生み出し、一人ひとりの進路実現に結び付くのです。

「なぜそれをするのか」を教師自身が考える

学校の一体感を醸成するには、教師の意識共有も欠かせません。3年生の小論文指導は、1、2年生の先

生方にも協力してもらっています。1人でも受験生の指導を受け持てば、当然、生徒の合否が気に掛かります。他学年の先生にも受験の緊張感を味わわせることで、当事者意識を持つてもらうことが狙いです。

どのような取り組みでも、大勢の先生を巻き込んでいくことで学校全体の勢いが出てきます。教師は多忙のあまり、一つひとつの取り組みの意味を考えずに進めてしまうことがあります。しかし、何の見通しもなく、事後の総括もない取り組みでは実りがありません。先生方にはなぜそれに取り組むのか、常に疑問を持っておかかわってもらいようにしています。そうすれば、生徒にどのような言葉を掛ければよいのか、どのような配慮が必要なのかということも、自ずと見えてくるからです。

日々の学習や行事が未来を生きる土台を育む

もう一つ、意識していることは、高校時代のあらゆる活動が社会で必

要な力の土台になることです。

分からないことをうやむやにせず理解しようとする努力、仲間と協力して何かを成し遂げていく体験、一つ上の目標を掲げて、それに向けて切磋琢磨していく経験。その一つひとつが、大学入学後、あるいは社会に出て学び続ける原動力になるのだと思います。

もちろん、本校でも学部・学科研究や職業調べなどの進路学習を行っています。しかし、社会でこういう力が求められているからその力を磨いていこう、こんな資格を取ろうと、社会の状況に合わせて身に付けるものを変えていける、社会に出てから伸びないばかりか、予想外の困難に遭遇した時に自力で乗り越えていくことも出来ないでしょう。

高校時代に大切なのは、今の社会に適應できる力を身に付けさせることではなく、どのような社会になっても未来を切り開いていける基礎力を身に付けることであり、それは日々の学習や行事の中から育まれていくものだと思います。